

## 薬事日報連載 第4回：「書くことへの“恐れ”を知り、それでも書く意義」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2024.5.21

僕は、“クロマトユーザー会”という研究会を長らく主宰している。今から約10年前、熱心な参加者から質問攻めに遭った記憶がある。仮に、エスブクロさんとしておこう。

「ボク、どうやったらクロマトの世界で、三輪さんのようになれるか？」

震撼した。初対面でこんなこと聞かれたことがない。懇親会の席にペンとメモ帳など持参しない。僕の一言一句、情報を決して逃すまいという圧力が凄かった。刑事か。それから彼の差し迫った業務状況を次々に聞かされ、その都度“ご意見番”の役割を求められた。マツコの番組か。質問は、拷問へ変わっていた。このままでは懇親会が終わってしまう。どうにか気の利いたセリフで、この迷惑な追っ手を撒けないものだろうか。

そのとき、ブルース・リーが僕に降りてきた。「考えるな、感じろ」と、2回答えた。本気か、というカオをされた。本気だ、という眼差しで返した。質疑応答は終了した。

「三輪さんが起業するまでに、一番重要な転機はどの場面でしたか？」

冒頭で自慢話に思われただろうが起業以来、公私の場面でこんな質問を受ける機会は、たしかに増えた。そして僕の回答は、たいていの聞き手を一瞬フリーズさせる。

今なおブルース・リーをお見舞いして追い払っているわけではない。事実即して丁寧に答えしているつもりだ。こちらにサプライズの意図は全くないが、結果としてそうなる。

僕は、エスブクロさんに謝罪しなければならない。確かにあの時は、口から出まかせを申し上げた。きっと「そんなわけない」と思ったことだろう。そんなわけがないのだ。

というわけで第4回は、エスブクロさんの質問に10年越しで応えるためにも、それなりに考えて感じた、試行錯誤の手応えをお伝えする。

クロマトグラフィーの知識と技術を独学で身につけた。それに並行して夜間の文学学校に通ってコトバを使うチカラを蓄えた。これらを組み合わせることで、“イノベーション”を成し得る土台が出来上がった。真剣にコトバと向き合ったことで、景色が変わって見えた。

事実と心象に従い、マジメに答えている。たいていの聞き手が本気か、というカオをする。

文学。サイエンスに特化したベンチャー企業の経営者に、小説家や詩人に求められるスキルが必要なのか。そう思われるかもしれない。そこで、僕自身の変化について説明する。

僕が通った“大阪文学学校”は、約70年の歴史を持つ。在籍時に講師としてお世話になった細見和之先生が、現在では校長を務められている。細見先生は、ドイツ思想の第一人者でありながら優れた詩人でもある。今でも僕は、先生の詩集を携帯して出張にのぞむ。

ここで覚えたことは、文章の書き方ではない。“書くことへの恐れ”だ。

一旦自分の手から離れてしまった文章の解釈は、全て読み手に委ねられる。そこに異論も反論も許されない。その覚悟がないのなら、日記に留めておくべきだと痛感した。

文学創作において“本気の人たち”が集まる場所で、もみくちゃにされながら実験を繰り返した。どんな創作をすればよいのか、混乱した。多少なりとも持っていた文章作成へ自信は、粉々に打ち砕かれた。一方で、“恐れながら書くことの意義”について、自分なりの仮説に辿り着いた。短く説明すると、こうなる。

「厳然たる事実を解析して、自分の心の動きをどうやって切り取ってみせたか。」  
大阪文学学校は、表立ってこんなことを教えてはくれない。あくまでも僕自身の解釈だ。僅か1年でこの学校を去ったが、書くことに十分な“心持ち”が得られたと判断した。連載第3回同様に、僕がスキルセットを身につけるに至った概要を図1に示す。

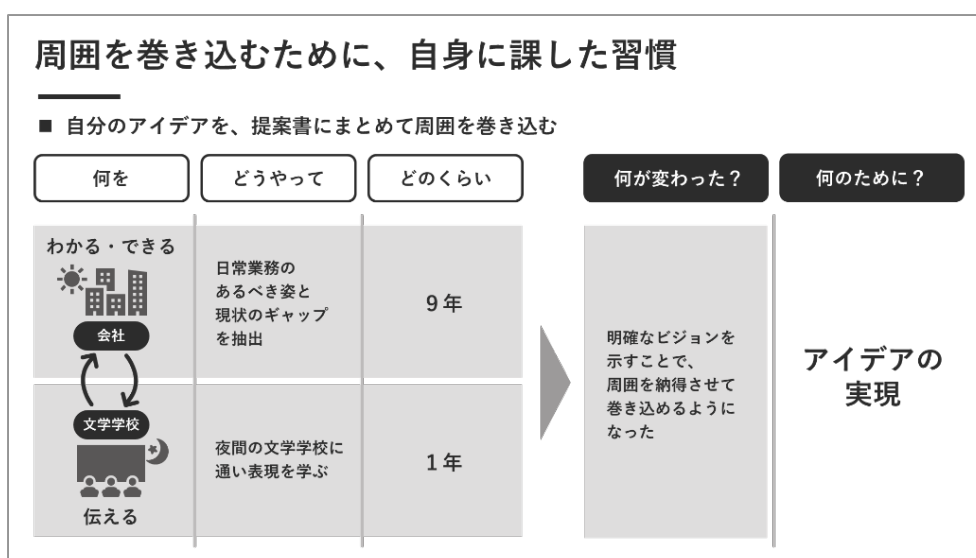


図1：夜間の文学学校に通ったことで起きた変化

クロマトグラフィーという科学技術について「分かる」と「できる」のサイクルを回し続けることで、さらに自信を深めていった。その技術の価値は、客観的に「伝える」ことでようやく理解してもらえる。対象者に伝えきるための“お作法”を以下に述べる。

「自分のやりたいこと」、「自分ができること」、「組織にとってすべきこと」の3つの要素が上手く噛み合うように表現すれば良い。エントリーシート作成の要領で十分なのである。

今のままでは動かしがたい現実に対して、どこにその原因があり、何故自分ならその問題を乗り越えられるのかが問われる。“書くことの恐れ”を十分に知る者が、その身を削って切り出した提案だからこそ、その内容は“凄み”を持つ。

こうした矜持に従った取り組みを約10年続けた。以来、タケダにおける僕の提案・企画はほぼ全て、上層部の承認を取り付けることになる。

エ ン ト リ ー シ ー ト																
ふりがな	みわ かつひこ															
氏 名	三輪 勝彦															
生年月日	昭和46年 12月 22日 生まれ															
学 歴	国立宇部工業高等専門学校 工業化学科															
自己PR	<p>■これを読んで「ホネ」のありそうな奴だと思われたら</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) クロマジーンのウェブサイトをご覧ください</li> <li>2) 仕事の依頼をご検討ください</li> <li>3) 僕と愉快的仲間たちと一緒に、イノベーションに挑戦しましょう</li> </ol> <p>■できること</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>スキル分類</th> <th>コンピテンシー 結果を出すために安定して発揮できる行動</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">テクニカルスキル</td> <td>クロマトグラフィー</td> <td>クロマトグラフィーを誰でも使えるようにするための「ロジック解明」と「共通言語化」ができる</td> </tr> <tr> <td>文章作成</td> <td>ビジネス・サイエンス・文芸など多角的に特な文章が書ける</td> </tr> <tr> <td>コンセプチュアルスキル</td> <td>問題の特定と新たな価値の創造</td> <td>日常に不足している問題について独自の視点から因果を特定し、それに見合う打ち手を考えられる</td> </tr> <tr> <td>ヒューマンスキル</td> <td>他者の巻き込み</td> <td>「なんかこれから楽しいことが起こりそう」と周囲に期待を持たせ、仲間を増やすことができる</td> </tr> </tbody> </table> <p>■やりたいこと</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) クロマトグラフィーを効率化することで研究活動全体の生産性を高める</li> <li>2) 日本の優れた研究者を本業に専念させて、競争優位性の高い成果を創出できるように支える</li> <li>3) 上記のようなことができるクロマトグラフィーは、他の研究職と同じくらい価値ある業務であると認知してもらって土台をつくる</li> </ol> <p>■組織にとってすべきこと</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 創薬研究のイノベーションの方向性を決めるべき       <ol style="list-style-type: none"> <li>①何をつくるのか ②どうやってつくるのか</li> </ol> </li> <li>2) ②を選んだ場合は、自分が大きく貢献できる創薬研究活動のボトルネックがクロマト工程であり、その効率化、自動化、脱属人化において自分がプロフェッショナルだから実現可能</li> <li>3) 上記の取り組みにより、ただかかろクロマト工程だけの変革で、投下資源を削減し、研究活動全体の生産性向上を実現でき、費用対効果を示せる。上記を通じて、<b>今すぐ組織の競争力を確保すべき。</b></li> </ol>			スキル分類	コンピテンシー 結果を出すために安定して発揮できる行動	テクニカルスキル	クロマトグラフィー	クロマトグラフィーを誰でも使えるようにするための「ロジック解明」と「共通言語化」ができる	文章作成	ビジネス・サイエンス・文芸など多角的に特な文章が書ける	コンセプチュアルスキル	問題の特定と新たな価値の創造	日常に不足している問題について独自の視点から因果を特定し、それに見合う打ち手を考えられる	ヒューマンスキル	他者の巻き込み	「なんかこれから楽しいことが起こりそう」と周囲に期待を持たせ、仲間を増やすことができる
	スキル分類	コンピテンシー 結果を出すために安定して発揮できる行動														
テクニカルスキル	クロマトグラフィー	クロマトグラフィーを誰でも使えるようにするための「ロジック解明」と「共通言語化」ができる														
	文章作成	ビジネス・サイエンス・文芸など多角的に特な文章が書ける														
コンセプチュアルスキル	問題の特定と新たな価値の創造	日常に不足している問題について独自の視点から因果を特定し、それに見合う打ち手を考えられる														
ヒューマンスキル	他者の巻き込み	「なんかこれから楽しいことが起こりそう」と周囲に期待を持たせ、仲間を増やすことができる														

図2：ChromaJean 社長・三輪のエントリーシート例

要するに泥臭いハナシである。だから前回、タイガーマスクの“虎の穴”に例えた。

ところで僕は、80年代アイドルに心奪われた世代だ。どうしても許せないインタビュー記事がある。「兄が勝手に応募した」という、芸能界入りのきっかけの模範解答だ。全員が全員、そんなわけがあるか。「血の汗を流してエントリーシートを書いた」と白状して欲しい。誰がそんなフェイクアピールを真に受けるのか。僕だ。青少年の純情を返せ。

「もともと自分にその気はないけど、周りがどうしてもと言うのなら。」僕が芥川賞をいただいた暁には是非言ってみたいものだ。50過ぎにして、中二病をこじらせている。

何者かになるべく活動する前から、上司や配下や顧客が自動的に“推し”になることはない。だから青少年もギャルも中二も中年も、ハラを決めて泥臭く続ける意外に道はない。

自分の持つ専門性を高め、その強さを表現する“心持ち”を得て以来、仕事を通じた自己実現が面白くなりはじめた。社内において、クロマトグラフィーのエキスパートとして認知された頃だった。そして現場を率いる主任研究員に着任した。ここから、もう少しカラフルな人生に変わっていくと思っていた。しかし、そう上手くには事は運ばなかった。

そして僕は、闇オチした。これについてはまた次回に述べる。

約10年前、エスブクロさんに狼藉をはたらいてしまった。だが僕にも多少のエクスキューズがある。初対面の人に向かって本連載3、4回目のボリュームで熱く語り始めたらどうなる。それはそれで本気か、と思われたに違いない。

一方で、当時の僕が明確なキャリアプランを描いていたかと言うと、かなり怪しい。感じたままに動いたような気がする。だから「考えるな、感じろ」は、今になって思えばむしろ適当な表現だったかもしれない。あの頃、「そんなわけがあるか」のカオをした彼との交友関係は、今も続いている。ともあれ、泥臭い試行錯誤が起業に繋がった。

クロマジーンの社長になるきっかけの質問は、たしかに増えた。こちらも多少、返答に慣れてきた。万が一に備えて、80年代アイドルにも負けないテキトーな回答を用意している。「ネコが勝手に登記した。」

破壊的な“イノベーション”は、いつも中二病的な発想からはじまる。

登 記 申 請 書	
ふりがな	かぶしきがいしゃくろまにゃーん
会社名	株式会社 ChromaNyaan
事業目的	みんながおいしいカリカリをたべて、おなかいっぱいになるように。
 代表取締役社長 三輪 おこげ ザ・ローレンス 	

図3：仮想・おこげ社長の登記例